リレーおぴにおん

聖地巡礼 4

民主化つかんだ地 韓国の「義郷」

日本でもヒットした韓国映画「タクシー運転手　約束は海を越えて」は、1980年5月の光州（クアンジュ）事件を描いたものです。韓国南西部の光州市で、後に大統領となる全斗煥（チョンドゥファン）将軍が主導する軍部が、民主化を求める市民、学生らを武力で抑え込み、多くの犠牲者をだしました。韓国では「光州民主抗争」などと言います。

87年に民主化が宣言されると、全国の大学生が「民主聖地」と呼ばれる光州に巡礼の旅を始めました。遺族はひつぎに模したものを担いで市内を巡り、鎮魂の儀礼を行いました。

巡礼は、市民が立てこもり、制圧された全羅南道庁舎や犠牲者が眠る望月洞（マンウォルドン）墓地が必須コースで、学生運動の拠点だった全南大学なども回ります。今も毎年5月には連日、追悼行事が行われ、観光パンフレットにも巡礼コースが紹介されています。

社会学者　真鍋（まなべ）　祐子（ゆうこ）さん

1963年生まれ。東京大学教授。著書に「増補　光州事件で読む現代韓国」、訳書に「韓国人権紀行　私たちには記憶すべきことがある」など。

当時の大学生たちは、知識人として何をすべきか、真剣に悩みました。「多くの市民が犠牲になったのに、自分は何もできなかった」という罪責感を抱きつつ、80年代以降の民主化運動を引っ張りました。その意味で光州は運動の原点であり、正義のふるさと、つまり「義郷」とも呼ばれます。

光州を中心とする韓国南西部の全羅道地方は、歴史的にみても抵抗の地でした。19世紀末には、腐敗した朝鮮王朝や日本の侵略に抵抗した甲午農民戦争が起き、日本の植民地支配下では独立運動もさかんでした。29年には、日本人の学生が朝鮮人の女子学生をからかったことが発端とされる大規模な抗日運動も起きました。韓国建国後、軍事独裁政権に反対して投獄され、民主化後に大統領となった金大中（キムデジュン）氏の地盤は、全羅道でした。

戦後、日本政府は韓国の軍事政権を一貫して強力に支え、南北分断に手を貸してきました。「タクシー運転手」の映画をみて「日本は平和でよかったね」とだけ思うのではなく、隣国の歴史に日本が深く関わっていることも理解してほしいと思います。

（聞き手・桜井泉）